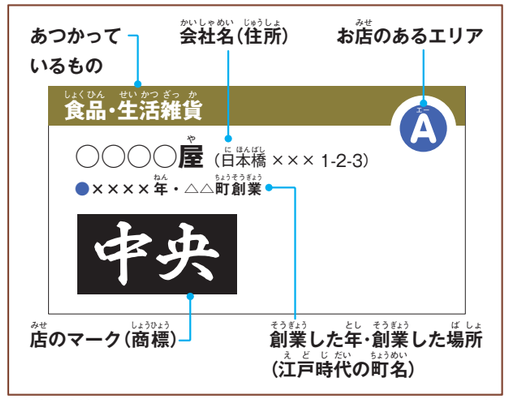
中央区には老舗がいっぱい！

江戸時代に、現在の中央区内で創業または営業し、今も中央区で営業しているお店・会社を紹介しよう。

食品

のり、鰹節、魚、和菓子、果物、お弁当などなど。江戸から続く味わいがいっぱいだ。老舗の食品は、贈り物としても人気が高いぞ。

老舗紹介の見かた



※各店の右上についているアルファベットは、143ページのエリアを示している。

のり　C

井上海苔店（日本橋小舟町15-13）
●1854年・通町創業

創業者の井上半七が現在の日本橋3丁目に乾しのり問屋を出店。明治・大正時代に東京湾の大森から浦安方面にのりの仕入れ地を広げていった。1959年、日本橋小舟町に移転した。

和菓子　A

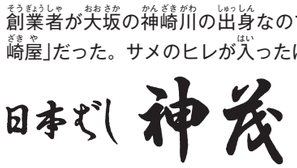
榮太樓總本舗（日本橋1-2-5）
●1857年・西河岸町創業

日本橋の南側に創業し、金つばや甘納豆が人気をよんだ。店の名前は、3代目の安兵衛の幼いころに名乗っていた名前栄太郎からとった。「梅ぼ志飴」の赤い缶がトレードマーク。

はんぺん・かまぼこ　A

神茂（日本橋室町1-11-8）
●1688年・本小田原町創業

創業者が大坂の神崎川の出身なので、はじめの名は「神崎屋」だった。サメのヒレが入ったはんぺんやかまぼこを製造していた。当時の半ぺん職人は「上物師」とよばれていた。



くだもの・洋菓子　A

千疋屋総本店（日本橋室町2-1-2）
●1834年・葺屋町創業

現在の日本橋人形町に「水菓子安うり処」として創業。1887年に開店したフルーツパーラー「果物食堂」で、アイスクリームソーダやフルーツポンチを出し、話題となった。

魚　F

尾寅（東京都中央卸売市場築地市場内）
●江戸初期・日本橋魚河岸創業

初代は尾張（現・愛知県）出身の尾張屋寅吉と伝えられている。江戸時代は多摩川や相模川などでアユを捕り、「鮎問屋尾寅」と名乗っていた。現在はまぐろ問屋。1950年代に築地へ。

和菓子　F

塩瀬総本家（明石町7-14）
●1349年・奈良創業（江戸での創業は通町）

室町時代、宋（現在の中国）の林浄因という人が、奈良で小豆のあんこ入りの饅頭をつくって売り出したのがはじまり。江戸時代に日本橋の近くに出店した。戦後、本店が明石町に移転した。

佃煮　F

佃茂（築地3-10-9）
●1789年・佃島創業

漁師だった下総屋長太郎が魚問屋を創業。2代目の茂吉が佃煮の製造をはじめたので店名は佃茂。1890年には佃島渡船場の近くに店を構えた。1926年に築地に移転した。

鰹節　A

にんべん（日本橋室町2-2-1）
●1699年・四日市創業

1704年に小舟町に鰹節問屋を開いた。「にんべん」とは創業者の伊勢屋伊兵衛の伊（部首にんべん）からとったもの。現在は鰹節だしスープが飲める店「日本橋だし場」も営業。

和菓子　E

梅花亭（新川2-1-4）
●1850年・大伝馬町創業

甘い物好き、新し物好きの創業者は岐阜県の出身。外国人につくりかたを聞いてくふうを重ね、和菓子を釜で焼いた「亜墨利加饅頭」が話題をよんだ。明治時代には楽器の銅鑼の形をした「銅鑼焼」が誕生した。

鰹節　A

八木長本店（日本橋室町1-7-2）
●1737年・小舟町創業

創業者が伊勢（現・三重県）出身だったので最初は「伊勢屋長兵衛」と名乗っていた。名字が八木なので、やがて「八木長」とよばれるようになり店名になった。

のり　A

山本海苔店（日本橋室町1-6-3）
●1849年・室町創業

初代山本徳治郎が、現在の場所に創業。2代目が1869年にはじめて「味附海苔」をつくり出した。のれんの梅マークは、のりは本来梅の季節にとれる海産物であることにちなむ。

酒　D

ぬ利彦（京橋2-9-2）
●1717年・松川町創業

初代の彦七が酒としょうゆの仲買商として創業。2代目がお酒を販売。3代目は両替商を開業。諸大名とも取り引きした。現在は酒販業のほか物流やコンピュータ関連の業務も行う。

弁当　A

弁松総本店（日本橋室町1-10-7）
●1850年・安針町創業

もとは魚河岸近くにあった樋口屋という食堂。忙しい客に料理を竹皮に包んで持たせたところ大好評となった。

店主が樋口松次郎といい、弁当屋の松次郎から「弁松」が店の名になった。

のり　D

山形屋海苔店（京橋2-6-21）
●1764年・小網町創業

店名は創業者の出身地、奥州（現・山形県米沢市）にちなむ。1873年にビンに焼きのりを詰めた「貯蔵（かこい）海苔」を創案。湿気ることなく長持ちするのりとして評判をよんだ。

茶・のり　A

山本山（日本橋2-5-2）
●1690年・通町創業

初代は山本嘉兵衛。1835年に6代目が「玉露」を発明し、江戸で販売したことから、高級茶の代名詞になった。また「山本山」という名のお茶も江戸時代から販売されていた。

※掲載したお店・会社は、『江戸東京学事典』（三省堂）の「江戸創業老舗一覧」を参考とした。

生活雑貨などなど

ファッションの中心でもあった江戸の町には呉服や羽織のひも、帯などをあつかう老舗が多く、今も健在だ。そのほかにも刃物や和紙、生活用具、専門道具のさまざまな商品をあつかうお店がたくさんある。

扇子・うちわ　C

伊場仙（日本橋小舟町4-1）

●1590年・堀江町創業

創業者は浜松出身の伊場屋勘左衛門。徳川家康入城の際いっしょに江戸に来て、幕府に和紙や竹製品を納めていた。江戸後期から歌川広重などの浮世絵をあしらったうちわを販売した。

はさみ　B

うぶけや（日本橋人形町3-9-2）

●1783年・大坂創業（江戸の創業は堀留町）

幕末の江戸に出店。明治時代に「メリケン鋏」（裁縫用のはさみ）を売り出した。メリケンとはアメリカのこと。店名は、商品の刃物で、「うぶげもそれる、切れる、ぬける」ことにちなむ。

呉服　D

越後屋（銀座2-6-5）

●1755年・京橋南伝馬町創業

越後（現・新潟県上越市）から江戸に丁稚奉公にきた永井長助が、のれんなどを染める藍染め屋を創業。その後、呉服の商いをはじめた。2代目が現在の場所に店を移した。

手芸用品　D

越前屋（京橋1-1-6）

●1865年・中橋広小路創業

越前（現・福井県）の武士が江戸に出て、和装小物（羽織のひもや帯じめ）の商売をはじめた。明治時代になると、英国製の毛糸やししゅう針を輸入。マークは創業当時からのもの。

刷毛・ブラシ　C

江戸屋（日本橋大伝馬町2-16）

●1718年・大伝馬町創業

徳川家の化粧刷毛や絵師の刷毛をつくっていた利兵衛が、1718年に将軍から「江戸屋」の屋号を与えられて創業した。現在は歯ブラシや洋服ブラシなど3000種ほどのブラシをつくっている。

もぐさ　B

釜屋もぐさ（日本橋小網町6-1）

●1659年・小網町創業

もぐさとは、ヨモギの別名でお灸の原料。店名は創業者が釜七という鋳物師の手伝いをしていたことにちなむ。江戸中期から簡単にお灸できる「切りもぐさ」を販売した。

刃物　A

木屋（日本橋室町2-2-1）

●1792年・室町創業

本家の出身は大坂の林家。江戸で商売をはじめるに当たり、林の字を2つに分けて木屋とした。当時、木屋は小物屋、漆器屋など何店もあった。刃物の木屋だけが今に残っている。

糸、組紐　D

銀座久のや（銀座1-28-1 お店は銀座松屋内）

●1837年・南鍋町創業

創業者の久野屋菊地利助が麻綿糸問屋として、縫い糸や麻紐を売っていた。大正時代には帯や羽織紐の販売のほか、フランスやイギリスからレース糸やビーズ手芸用品を輸入した。

漆器　A

黒江屋（日本橋1-2-6）

●1689年・本町創業

創業者は紀州（現・和歌山県海南市）黒江村の出身。6代目から柏原家の経営になり、現在の場所に移った。紀州で有名な漆器「根来塗」は、黒江屋もつくっていた。

楊枝　B

さるや（日本橋小網町18-10）

●1704年・小網町創業

江戸の町には猿の看板の楊枝店がいくつもあり、「猿屋の楊枝」は江戸名物だった。そのなかで唯一残った「さるや」がここ。楊枝はクロモジの木の若木を細くけずったものだ。

寝具　A

西川産業（日本橋1-5-3）

●1566年・近江創業（江戸では通町に出店）

創業者が19歳で生活用品や蚊帳（蚊に刺されないよう寝床を囲う布）の販売で開業。畳表のイグサもあつかう。ふとんの販売は1887年からはじまった。

和紙　A

榛原（日本橋2-8-11）

●1806年・通町創業

のれんに「雁皮紙榛原」とあるように、うすく、白く、なめらかな雁皮紙を販売していた。現在の便せんや封筒などに記された「榛原製」のマークは江戸時代からのもの。

化粧品　C

柳屋本店（日本橋馬喰町1-10-6）

●1615年・通創業

創業当時は食用紅、化粧紅、練紅、白粉、香油などを販売。大正時代に整髪料のポマードを販売して評判に。昭和にはヘアトニックがヒットした。現在も化粧品や整髪料を販売している。

印判　A

佐々木印店（堂町4-4-2）

●1725年・革屋町創業

初代は佐々木伊賀で、徳川家に仕えて江戸に来た。以来代々、徳川家や大名らの印判師としてハンコをつくってきた。実印制度が一般的になった8代将軍吉宗の時代に創業した。

薬　B

清心丹（日本橋人形町1-4-10）

●1801年・元大坂町創業

江戸時代は生薬をあつかう薬問屋だった。明治元年に丸薬「清心丹」を発売。胃痛・腹痛から頭痛にまできく家庭の常備薬だった。現在は薬局で、薬品や化粧品の製造販売もしている。

左官道具　D

西勘総本店（京橋1-1-10）

●1855年・南伝馬町創業

創業者の西田屋勘蔵の名前から店の名は西勘。関東大震災後には、左官屋の使う「コテ」を専門につくって、「西勘」の名を広めた。今も職人が1本ずつ仕上げている。

めがね　A

村田眼鏡舗（日本橋室町 3-3-3）

●1615年・大伝馬町

創業時は鏡店。1615年に京都の鏡師が江戸に来て、将軍家の手鏡などをつくっていた。明治時代、11代目がめがねづくりを学び、めがねの専門店に。島崎藤村らもお客だった。